

平成17年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

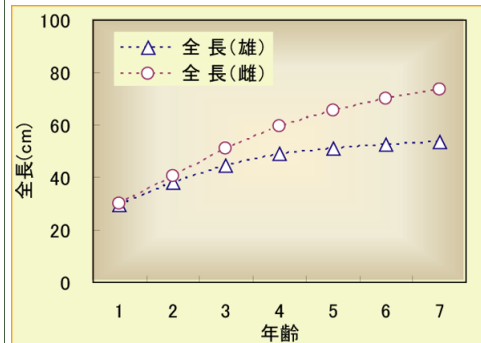
系群名 太平洋南部系群

担当水研 中央水産研究所



生物学的特性

寿命: 10歳(ただし過去には12歳の個体の採集例あり)
成熟開始年齢: 1、2歳(20～50%)、3歳(100%)
産卵期・産卵場: 産卵期は春季(3～4月)、産卵場は水深20～50mの砂質域
索餌期・索餌場: 不明
食性: 主要な餌料は、ふ化仔魚がプランクトン、着底稚魚がアミ類、稚魚以降はカタクチイワシやイカナゴ等の魚類
捕食者: 稚魚はエビジャコ、カニ類等の甲殻類やヒラメ1歳魚や他の魚類等、成魚は不明

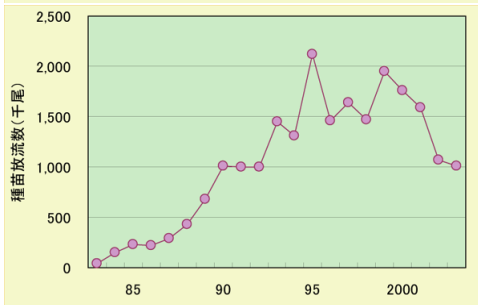
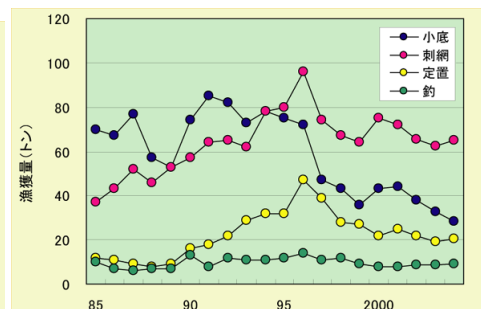
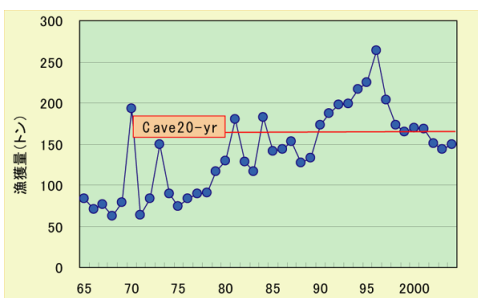


漁業の特徴

和歌山県を東限、鹿児島県大隅半島を西限とする太平洋南部海域でのヒラメ漁業は、主に刺網、小型底びき網、定置網、釣り等によって行われており、漁獲量はこの順番に多い。漁獲対象は1～2歳魚が主体であるが、0歳魚の漁獲もある。種苗放流が積極的に行われている。

漁獲の動向

1995年以降の漁獲量は、1996年に一時的に263トンまで増加して最高の値を示した後は減少したが、1998年以降は横ばい傾向にあり、2004年は150トンであった。漁獲努力量が比較的安定している定置網の漁獲量は、1996年をピークに減少している。漁獲努力量が比較的安定している定置網の漁獲量は、1996年をピークに減少を続けて、2004年は150トンであった。

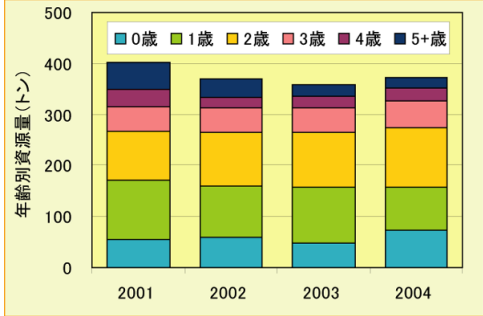


資源評価法

2001年以降の資料を用い、Popeの近似式を用いたコホート解析により年齢別資源尾数と漁獲係数を推定した。年齢は0～4歳と5歳以上(5+)の6階級に分けた。2004年の0～4歳魚の漁獲係数は各年齢の過去3年間の平均値を用い、5歳以上(5+)と4歳の漁獲係数は等しいとして計算を行った。自然死亡係数は過去の資料から0.2とした。

資源状態

南区の過去20年間の平均漁獲量は167トンであり、2004年の漁獲量150トンは最低レベルであった。全体の漁獲量をはじめ定置網の漁獲量が若干ずつではあるが減少が続いている。4年間のみのデータではあるが、年齢別漁獲尾数を基にコホート計算を行った結果、資源量は約350～400トンと推定された。しかし、これらの値に対する漁獲量の割合(漁獲割合)は常に40%以上であり大変高い値を示している。完全漁獲加入年齢の2+歳の漁獲係数も平均で1.01(2001～2003年)と推定され、この値も漁獲圧が高いことを示している。



管理方策

資源量および漁獲量を増加させるために、漁獲係数を引き下げることによって産卵親魚量を維持・増加させることを管理目標とする。加入量が過去最低であったとしても、現状の産卵親魚量(183トン)を維持できる漁獲係数を管理基準値として採用するが、低位減少であるため係数 β 2(0.77)を乗じて、Flimitを過去最低の加入量であった場合でも現状の産卵親魚量を維持できる漁獲係数($F=0.77$)とした。この漁獲係数によって期待される2006年の漁獲量をABClimitとした。また不確実性に配慮してFtargetはFlimit×0.8とした。

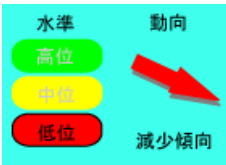
	2006年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	122トン	$0.77F_{sus}$	0.77	35%
ABCTarget	112トン	$0.8 \times 0.77F_{sus}$	0.62	30%

資源評価のまとめ

- 漁獲量は、近年では1996～1997年は減少傾向、1998年以降は微減傾向にある
- 漁獲割合および漁獲係数が非常に高い状態である
- 現状の漁獲係数は、加入あたりの漁獲量が最大となる漁獲係数Fmaxを大きく超えているので成長乱獲状態である

管理方策のまとめ

- 漁獲開始年齢の引き上げや体長制限により小型魚を保護することで、成長乱獲の状態を改善させる
- 加入量が低レベルの場合でも、産卵親魚量を維持できるような管理を行う



資源評価は毎年更新されます。
2005.12.8更新